

〈論文〉

## 王党派政治パンフレット『妖精の水平派』(1648) における読者への距離感

円 浄 ゆ り

### 要 約

チャールズ一世処刑前夜の1648年に出版された『妖精の水平派 (*The Faerie Leveller*)』は、王党派擁護を目的とした政治パンフレットである。本篇はエドモンド・スペンサー『妖精の女王 (*The Faerie Queene*)』第5巻からの抜粋であり、編者は王党派作家のサミュエル・シェパードとされる。序文において、シェパードは「単純な人々 (*simple people*)」である民衆が議会派の見かけ倒しに騙されないように出版を意図したと述べており、スペンサーの『妖精の女王』とはその出版目的を異にする。シェパードは物語において、全てを平等に量り分けると豪語し民衆を扇動する巨人をオリバー・クロムウェル、巨人を打倒する主人公騎士を国王チャールズと解釈し、巨人が崖から突き落とされる場面を用いて、国王の輝かしい勝利が預言されていると読者に語りかける。しかしながら、『妖精の水平派』が出版されたのは王党派の敗北がほぼ決していた時期であり、シェパードは実際の読者感化の可能性に対し懐疑的であったと思われる。巨人の転落後、暴徒と化した「単純な人々」が打ち負かされる場面がパンフレットには含まれており、容易に扇動されてしまう彼等を読者対象に据えるシェパードの解釈に、民衆に対する悲観的態度が透けて見える。

### キーワード

17世紀イギリス内戦 王党派政治パンフレット 政治寓意 サミュエル・シェパード  
『妖精の女王』

### I.

1

17世紀中葉のイギリスは、国内の支配体制を巡り、王党派と議会派が政治的・宗教的に相争った動乱の時代である。この内戦は「ピューリタン革命」とも呼称されるが、1649年のチャールズ一世 (Charles I, 1600-1649) 処刑による王党派の完敗と、支配権を獲得した議会派による共和制の樹立は、この国内動乱を「革命」と呼ばしめる象徴的出来事と言えよう。開戦当初は王党派が優勢であったが、1645年6月のネイズビーの戦いで、オリバー・クロムウェル (Oliver Cromwell, 1599-1658) 率いる議会派軍が決定的勝利を収めて以降、王党派勢力は衰え続け、1646年6月に国王が根城としたオック

スフォードが陥落、翌1647年にチャールズは議会派に捕虜として引き渡される<sup>1)</sup>。議会派への攻撃を目的とした政治パンフレット『妖精の水平派 (*The Faerie Leveller*)』が出版されたのはその翌年の1648年である。『妖精の水平派』は匿名出版であるため、出版を意図した人物を特定する決定的証拠は現存しないが、John N. Kingによれば、「最も可能性の高い編者 (the most likely editor)」は王党派作家のサミュエル・シェパード (Samuel Sheppard, c. 1624-1655?) である<sup>2)</sup>。シェパードはチャールズ処刑後の1650年頃、『妖精の女王 (*The Faerie Queene*, 1590, 1596)』を模し、亡き国王を主人公とした『妖精の王 (*The Faery King*)』と題する詩作品を執筆している<sup>3)</sup>。また、国王処刑以前は王党派作家として活躍し、複数の週刊新聞 (newsbook) の発行にも携わった。サー・ジョージ・ウォートン (Sir George Wharton, 1617-1681) が1647年11月5日に創刊した『メルクリウス・エレンクティクス (*Mercurius Elencticus*)』という週刊新聞が存在するが、Kingによれば、議会派の王党派新聞に対する取り締まりでウォートンが投獄中、編者を務めたのがシェパードであり、彼が編集をしたと推せられる第35号 (1648年7月19-26日) に、『妖精の水平派』の広告記事が掲載されている<sup>4)</sup>。『妖精の水平派』についての先行研究は、イギリス国内においてもわずかであるが、上述二点の手がかりより『妖精の水平派』の編者がシェパードであると推定されている<sup>5)</sup>。題名である『妖精の水平派』とは、エリザベス朝詩人エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552?-1599) の代表作『妖精の女王』をもじったものであり、パンフレットの内容は序文を除いて『妖精の女王』第5巻からの引用となっている (第5巻第2篇29-54連)。しかし、『妖精の水平派』を『妖精の女王』からの単なる引用とみなせないのは、表紙や序文にシェパードの政治利用の意図が明白に示されているからだ。『妖精の水平派』は、『妖精の女王』を17世紀王党派擁護の文脈で受容した翻案作品なのである。

## II.

『妖精の水平派』は王党派政治パンフレットとして、いかなる独自性を放っているか。まずは表紙に注目したい。前述の通り『妖精の水平派』が出版されたのは、チャールズ一世が処刑される前年の1648年であり、7月27日に書籍商のジョージ・トマソン (George Thomason, c. 1602-1666) により購入された記録が残されている。表紙には題名とともに副題がつけられ、本作の概要が示されている：

妖精の水平派：  
 または、  
 エリザベス女王の時代に  
 見出され、解き明かされた  
 国王チャールズの水平派。  
 女王の桂冠詩人 エドモンド・スペンサー により  
 『妖精の女王』と題された、  
 その比類なき詩の中に。

我らが時代の克明な描写。

アナグラム：  
 議会軍。  
 平等は万人を害す。

聖人軍の真向かいで印刷：敬虔な平等化のため、  
 聖人閣下各位が不敬虔な騒ぎを起こした年。1648。

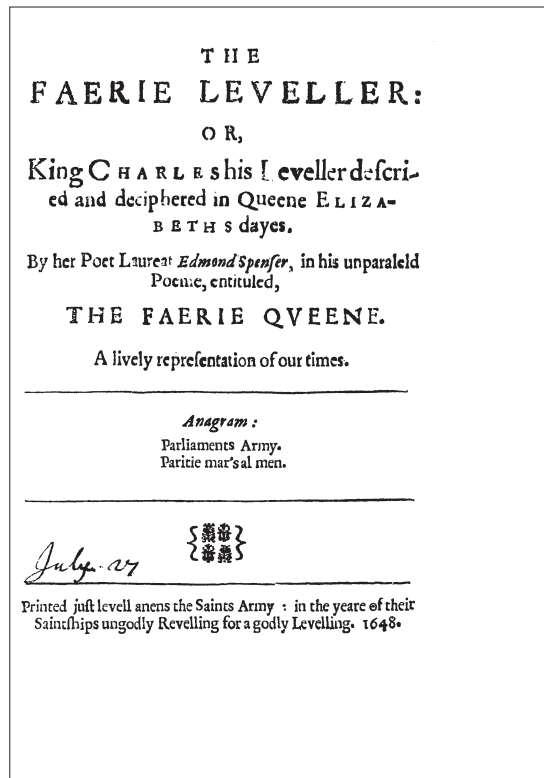


図1 『妖精の水平派』表紙<sup>6)</sup>

まず題名を変更している点に、シェパードの政治利用の意図が伺える。本編の内容が『妖精の女王』からの抜粋であるにも関わらず、シェパードは意図的に題名を変更し、『妖精の水平派』という別の作品であるかのように見せている。また副題において、読者を引きつけるための特筆すべき誇張表現が二点挙げられる。一点目は、スペンサーが桂冠詩人であるという点である。編者はスペンサーをエリザベス女王の桂冠詩人と明記しているが、スペンサーは実際のところ桂冠詩人ではない。スペンサーはたしかに桂冠詩人になる野心を持ち、『妖精の女王』をエリザベス女王に献呈してはいるが、彼が宮廷に召し抱えられることはなかった<sup>7)・8)</sup>。二点目は、国王チャールズに敵対する水平派がエリザベス朝の時代に「見出され、解き明かされた」という表記である。スペンサーが未来の出来事を念頭に置き『妖精の女王』を執筆したはずのないことは明らかである。しかしながら、シェパードは副題で「見出され、解き明かされた (descried and deciphered)」という表現を使用し、あたかも「エドモンド・スペンサーにより見出され、解き明かされた水平派 (Leveller descried and deciphered by Edmund Spenser)」と読み替えられる言葉の配列をしている。スペンサーはその死後、チャーサー以来の大詩人として人気を博し、17世紀初頭にはすでにスペンサーの作風を模したアダプテーション作品が多数出版されていた<sup>9)</sup>。シェパードは、「大詩人」スペンサーが『妖精の水平派』の出版を意図したと読者が読み違える表記をすることで、より読者の関心を高めようとしている。

シェパードが出版情報を隠蔽し、不正確かつ誇張した題名を付すことができたのは、1641年以降、政府による出版物検閲制度が崩壊していたからである。内戦以前の出版制度では、印刷物の独占権を握る出版印刷業組合に登録した上で、教会の認可を得るという二重の検閲制度が施行されていた<sup>10)</sup>。しかし、1640年11月の長期議会の開催により、翌41年7月に星室庁が廃止されると、それに伴い既存の検閲制度も崩壊し、その後の出版物数は爆発的一途をたどる。ちなみに前述の書籍商ジョージ・トマソ

ンは書籍収集家でもあり、彼は『妖精の水平派』を購入した1648年に、1408点の政治パンフレットと612点の新聞を収集している<sup>11)</sup>。出版物検閲制度の崩壊は、出版における言論の自由を拡大させるとともに、誹謗中傷を含めた、過度に誇張した内容の印刷物発行をも可能にする。『妖精の水平派』が出版された時期には既に検閲制度が崩壊していたため、このような誤読を誘導する表記での出版が可能であったのだ。

1641年以降、王党派は議会政府の許可なく急進的なパンフレットや新聞を大量に印刷するようになる。Lois Potterによれば、王党派による出版物は、一大勢力となった議会派の転覆を狙うラディカルさを備えており、本編よりも誇張した題名をつけたり、過去の印刷物をあたかも最新の出版物であるかのように装ったりした。加えて、偽の著者や出版日を記載する場合も多く見られた<sup>12)</sup>。『妖精の水平派』もPotterの指摘する王党派印刷物の性質を備えていると言える。前述の通り、シェパードは『妖精の水平派』をスペンサーが新たに出版した王党派政治パンフレットであるかのように演出している他、アナグラムでは「議会軍 (Parliaments Army)」という言葉で「平等は万人を害す (Paritie mar's al men)」と並べ替え、「平等」という言葉で「水平派」を揶揄した誹謗中傷をしている。また、出版場所・出版年に関しても「聖人軍のちょうど真向かい (levell) で印刷：敬虔な平等化 (Levelling) のため、聖人閣下各位が不敬虔な騒ぎを起こした年。1648。」と記されており、虚偽の印刷情報で議会派の主要構成員であったピューリタン(「聖人」はその別称)と水平派を揶揄した言葉遊びをしている<sup>13)</sup>。表紙からは、実際の編者や印刷場所を特定することはできないが、不正確な情報の記載こそ内戦期における政治パンフレットの特徴であり、『妖精の水平派』はその典型的特徴を備えている。

### Ⅲ.

新たにつけ加えられた『妖精の水平派』の序文は、「寓意を理解するために必要な前書き (A necessary Preface opening the Allegory)」と題され、パンフレットの出版意図と、いかに読むべきかの指針が読者に示されている<sup>14)</sup>。シェパードの序文は、スペンサーの『妖精の女王』に付された「ローリへの手紙」を念頭に置いているようだ。「ローリへの手紙」は、サー・ウォルター・ローリ (Sir Walter Raleigh, 1554-1618) に宛てた手紙という形式を取りながら、読者に物語解釈の指針を示したものであり、副題に「この作品全体の意図を説明する作者の手紙」と記載されている<sup>15)</sup>。Gordon Teskeyによれば、寓意は隠された真意を覆うヴェールの役割を果たし、物語というヴェールの下に隠された作者の真意は最後まで明かされることがないため、読者は寓意が指し示す意味を自ら解き明かさなければならない<sup>16)</sup>。物語から何を学びとるかは読者の手に委ねられているため、寓意物語は常に解釈の揺らぎに曝されている。スペンサーは寓意解釈の不確定性に意識的であり、読者の寓意理解に一定の方向性を示すために「ローリへの手紙」を付したのだ。スペンサーによると、『妖精の女王』の目的は「紳士、即ち身分ある人に立派な道徳教育を施すこと」である<sup>17)</sup>。すなわち、『妖精の女王』を読んだ読者は、寓意物語を通して高貴な身分にふさわしい「徳」を身につけることができるというのである。実際、『妖精の女王』の各巻には主題となる「徳」が定められており、主人公の騎士はその徳を最終的に体現する人物として描かれている<sup>18)</sup>。スペンサーの『妖精の女王』は、寓意物語を通して読者に高貴な「徳」を教授することを目的としている。

一方、シェパードの『妖精の水平派』は王党派の政治パンフレットであり、『妖精の女王』とはその出版目的を異にしている。シェパードはその序文の中で、『妖精の女王』第5巻第2篇の寓意物語を「満杯の宝箱から取り出された、まばゆく輝く宝石 (a resplendent Jewell, taken out of a full Cabinet)」に

例え、その宝石を取り出し、現代の用途に加工すれば特別な関心と注意を引くことができると述べている<sup>19)</sup>。現代向きに加工するとは、すなわち『妖精の女王』を王党派パンフレットとして政治的に利用することを指す。また詩人でもあったシェパードが、他の詩人の作品を用いることに関しては、以下のよう述べている：

これが出版者自身の作ではないからといって、軽んじるなかれ：誰が、蜘蛛がその体内から糸をつむぐからといって、蜘蛛の巣を少しでも良いものと思うだろうか？ もしくは、働き蜂が方々の花から蜜を集めたからといって、ハチミツを悪く思うだろうか？

slight it not, because it is not the publishers owne invention: who does esteeme the Spydres webbe any whit the better, for that it is spunne out of her owne Intralls? or like hony the worse, for that the industrious Bee gathers it from Flowers abroad? <sup>20)</sup>

すなわち、ここでは詩人本人が執筆した作品が、蜘蛛自身が作りあげた蜘蛛の巣に喩えられ、他の詩人の作品を利用した翻案作品が、花の蜜を利用して作り出されたハチミツに喩えられている。シェパードは、自身の作品が必ずしも読者に愛でられる訳ではなく、反対に他者の作品を利用した翻案作品の方が愛でられる場合があるということ、極端な比喻を用いて誇張している。表紙とは対照的に、シェパードは『妖精の水平派』がスペンサーの高い知名度を利用した翻案作品であることを、序文であっさり認めている。そればかりか、翻案作品の方が愛でられる場合があるのだと、自らの出版物の作品価値を信じて疑わない。序文において、シェパードは『妖精の水平派』が『妖精の女王』とは別物であることを読者に印象付けている。さらに、その出版意図に関しても、シェパードはスペンサーと全く意を異にしている。シェパードは一読者として、『妖精の女王』の寓意物語を17世紀の政治的文脈で解釈し、その解釈を「寓意を理解するために必要な前書き」として読者に提示しているのだ：

彼等（水平派）は遠い昔のエリザベス女王の時代に見出され、英詩の王エドモンド・スペンサーによって克明に描出されている。彼の詩は当時預言詩であったが今や我々の時代の歴史詩となっており、私が今しがた手直しし、単純な人々が騙されないよう新たに出版したものだが、単純な人々はあの詐欺師たちについての過大評価や高言にあまりにも流されやすく、すべてを完全な平等へと戻し、権利と自由をすべての人に還元するという彼等の体の良い見かけ倒しにあまりにも進んでそそのかされてしまうのだ。

they [Levellers] were discredyed long agoe in Queene *Elizabeths* dayes, and then graphically described by the Prince of English Poets *Edmund Spenser*, whose verses then propheticall are now become historicall in our dayes, I have now revised, and newly published them for the undeceiving of simple people, too apt to be induced into an high conceipt and overweening opinion of such Deceivers, and too ready to be seduced by their specious pretences of reducing all to a just equality, and restoring all to their rights and libertie: <sup>21)</sup>

5

シェパードによると、「詩人の王」であるスペンサーが執筆した『妖精の女王』の第5巻第2篇の寓意物語は、水平派について予言したものであり、「単純な人々」は水平派の「体の良い見かけ倒し」にあ

まりにも簡単に扇動されてしまうので、彼等が騙されないよう『妖精の水平派』を新たに出版することにしたのだという。すなわち、シェパードの読者対象は王党派支持者のみならず、議会派の「見かけ倒し」に騙されている「単純な人々」を特に想定しており、その主な出版目的は「単純な人々」への政治的感化なのである。

シェパードは『妖精の水平派』の読者対象を明らかにした後、これから引用する寓意物語に登場する人物たちが何を象徴しているかを説明している。彼によると「正義の王アーティガル (Arthegall Prince of justice)」は国王チャールズ一世を表し、「水平派の巨人 (The Gyant Leveller)」はオリバー・クロムウェルを指す<sup>22)</sup>。シェパードは第5巻の主人公騎士アーティガルを「正義の王」、巨人を「水平派」と呼称することで、王党派プロパガンダとしての恣意的解釈を読者に促している。表紙に引き続き、ここでもシェパードの独自解釈に事実との齟齬が見られる。シェパードは水平派の巨人がクロムウェルであると解釈しているが、厳密に言えば、クロムウェルは水平派ではない。水平派とは、平等派とも呼称される、イギリス内戦期に登場した議会派政党の一派である。神の名の下に人はみな平等であるという思想を掲げ、独占的商業組合の解体、議員や特定団体の法的特権の廃止、十分の一税の廃止など、政府運営に関して急進的な平等と自由を主張し、農民・兵士などの平民層の支持を得た。しかし、その無政府主義的思想・過激さゆえ1649年5月に独立派のクロムウェルにより議会から排除される<sup>23)</sup>。シェパードは彼等とクロムウェルを一緒くたにし、王に反逆する「詐欺師たち」とみなしているようである。John. N. Kingはシェパードの解釈が「過度に単純化しすぎている (greatly oversimplify)」と指摘しており、「水平派 (Leveller)」や「聖人 (Saint)」といった名称は、議会派の保守派であるプレスビテリアンを除く、残りの党派の総称として用いていると指摘している<sup>24)</sup>。シェパードは登場人物の寓意解釈を導入する際「わたしは作品のカギを一時的に諸君に与えることができると思う (I suppose I may briefly give you this key of the work)」と、“I suppose I may”を用いた確信のない、迂遠な言い回しをしている<sup>25)</sup>。『妖精の水平派』が読者啓発のための政治パンフレットであることと、これまでのシェパードの誇張表現を鑑みるならば、ここでの表現はかなり曖昧である。シェパードは、自らの寓意解釈がこじつけであることに意識的であったのかもしれない。読者への訓育を目的として出版された『妖精の女王』を、政治パンフレットとして再解釈する際に、シェパードの出版意図の相違が彼の恣意的な寓意解釈をもたらしており、その独自解釈が生み出した「ひずみ」は、シェパードの曖昧な導入表現によって象徴されている。

#### IV.

『妖精の女王』第5巻第2篇の寓意物語において、シェパードはどのような点に王党派政治パンフレットとしての特徴を見出したのであろうか。第5巻の主人公、正義の騎士アーティガルが、従者タラスとともに旅を続けていると、突然大きな人だかりを発見する。そこに駆けつけてみると、巨人が岩の上に立ち、大きな天秤を手に群衆を感心させている光景を目にする：

行って見ると、強そうな巨人が  
 岩の上に立ち、手に持った  
 巨大な秤を高く差し上げて、  
 傲慢不遜な態度で、  
 もし何か釣り合うものがあれば、

全世界をこの秤で量ってみせると高言していた。  
それがないので、彼は虚栄心を秤にかけ、  
がらくたを皿いっぱい載せたが、  
それでも、愚か者や女子供は大いに感心していた<sup>26)</sup>。

There they beheld a mighty Gyant stand  
Upon a Rock, and holding forth on high  
An huge great paire of Ballance in his hand;  
With which he boasted in his surquedry,  
That all the world he would waigh equally;  
If ought he had the same to counterpoys:  
For want whereof he waighed vanity;  
And fil'd his Ballance full of idle toyes:  
Yet was admired much of Fooles, Women, and Boyes. <sup>27)</sup>

巨人は「傲慢不遜な態度」で全世界を秤にかけてみせると公言し、全世界に釣り合うものが他にないので、虚栄を秤にかけて人々を驚かせる。Marissa Nicosiaが指摘しているように、『妖精の女王』ではもとも小文字で記されていた“ballance”という単語はシェパードの編集で意図的に大文字“Ballance”へと変更されている<sup>28)</sup>。“Balance”は「秤」を意味するが、同時に水平派が主張する平等主義についても暗示している。この巨人は手に持った秤で、万物をみな平等に分配すると主張し、民衆を扇動する。シェパードにとって、平等主義を掲げる巨人はまさに王党派に対する強大な脅威として映ったことだろう。巨人の演説は続き、海が陸をすり減らしたように、現在は万物が互いを侵害し、釣り合いが取れていないものばかりであるから、それを昔作られた通りにもとに戻すのが自らの仕事であると豪語する。それを聞いた群衆は、「蜜ツボの周りに集まる愚かな蠅」のように周囲に押し寄せる：

そのために俗衆は、蜜つぼの周りに集まる  
愚かな蠅のように彼の周りに群がり、  
その他愛もない嘘を聞こうと押し寄せ、  
この人のおかげで莫大な利益にあずかろう、  
そして思う存分自由を手に入れようとした。  
アーティガルはこの男が単純な民衆に  
間違った考えを吹き込む一切を目で見、耳で聞くと、  
苦々しげな態度でこの男に近づき、  
挨拶もせねば恐れもせず、こう話しかけた<sup>29)</sup>。

Therefore the vulgar did about him flocke,  
And cluster thick unto his leasings vaine:  
(Like foolish Flies about a hony crocke)  
In hope by him great benefit to gaine,  
And uncontrolled freedome to obtaine.

All which when *Arthegall* did see, and hear  
 How he mis-led the simple peoples traine.  
 In 'sdainefull wise he drew unto him neere,  
 And thus unto him spake without regard, or feare.<sup>30)</sup>

甘い言葉に簡単に扇動されてしまう群衆の愚かさが、比喩を用いて効果的に表現されているが、7行目に登場する“the simple people”という表現は特筆に値する。なぜなら、「単純な人々」と訳せるこの集団こそ、シェパードが序文で読者対象として挙げた人々だからだ。シェパードの出版目的は、「単純な人々が騙されないように」することであった。序文では、王党派のプロパガンダとして、民衆への政治的啓発の可能性を信じて疑うことのない表現に思われるが、本篇を考慮するとシェパードの表現に陰りが生じる。果たして、シェパードはどこまで本気で民衆に対する政治感化の可能性を見出していたのか。民衆を「愚かな蠅」と表現するこの寓意物語を、政治パンフレットとして利用するシェパードの姿勢に、民衆への心的距離感を見出さざるを得ない。

シェパードとは異なり、スペンサーは「単純な人々」を読者対象とはみなしていなかったようである。スペンサーの『妖精の女王』は読者をジェントルマンとして道徳的に教育することが目的であるが、当時のジェントルマンは宮廷人とはほぼ同義であった。Philip Masonは「当時の宮廷人は要するに功名心あるジェントルマンのことであり、両者の理想は酷似していた(A courtier then was simply a gentleman with ambition and the two ideals are very close together)」と論じている<sup>31)</sup>。すなわちスペンサーにとって、ジェントルマンになる可能性のない下層階級の人々は『妖精の女王』の読者対象から外れるのである。さらに、前頁引用部で「単純な人々」は1行目の「俗衆(the vulgar)」の言い換えであり、「単純な(simple)」という言葉自体にも「身分が低い(poor or humble in condition)」という意味が包含されている<sup>32)</sup>。引用部における「単純な人々」とは、すなわち「身分の低い民衆」のことなのである。続く52連と54連でも、スペンサーは群衆を「卑しい、下賤な」という意味の“rascal”を用いて形容しており、スペンサーは第5巻第2篇の当該エピソードにおいて、扇動される民衆を否定的に捉えていることがわかる<sup>33)</sup>。

スペンサーの民衆に対する否定的態度は、アーティガルの民衆に対する対処の仕方にも表れている。民衆に誤った分配を主張する巨人に対し、アーティガルは、万物はみな神の裁量に定められた秩序を保っているのに、侵害されているものなど何一つない、と巨人の説得を試みる。しかし、巨人が納得することは決してなく、業を煮やした従者タラスが巨人を崖から突き落とす。それを見た民衆たちは暴徒と化し二人に襲いかかるが、タラスの圧倒的な力の前に蹴散らされる。アーティガルに代わり従者タラスが群衆に打ちかかったのには意味がある。アーティガルは「下賤な者どもの卑しい血で自分の気高い手を汚したくはなかった」のである：

8

この無法な群衆が戦いの構えをして、  
 向かって来るのを見ると、アーティガルは  
 大いに当惑し、どうしたらいいか分からなかった。  
 彼はこういう下賤な者どもの卑しい血で  
 自分の気高い手を汚したくはなかったし、  
 だからといって、もし退けば、  
 追われて恥をかきほしくないかと恐れた<sup>34)</sup>。



Which Lawlesse multitude him comming to  
 In warlike wise, when Arthegall did view,  
 He much was troubled, ne wist what to doe,  
 For loath he was his noble hands t'embrew,  
 In the base blood of such a Rascall crew,  
 And otherwise if that he should retire,  
 He fear'd lest they with shame would him pursue: <sup>35)</sup>

スペンサーは一行目で群衆を「無法な群衆 (Lawless multitude)」と表現しており、コントロールの効かない暴徒として描出している。「高貴な」騎士アーティガルにとって、下賤な民衆を相手にすることさえ恥となるため、その役回りを従者であるタラスに任せたとのである。アーティガルの群衆に対する態度は侮蔑的であり、彼等に対する共感など一切持ち合わせていない。『妖精の女王』の出版意図は、読者が物語に描かれた騎士の振る舞いから「徳」を学びとることであり、読者は「正義」の騎士アーティガルと心境を共にし、物語を読み進めていくことになる。すなわち、アーティガルと民衆の間の心理的断絶は、読者の「民衆嫌悪」を喚起する効果があるのだ。『妖精の水平派』を『妖精の女王』の翻案作品とみなす際、その独自性が最も発揮されているのは、読者対象をジェントルマンだけでなく、下層階級の一般大衆にまで敷衍した点と言ってよいだろう。シェパードの読者対象は「単純な人々」と形容される民衆をも包含しているが、当該エピソードには「民衆嫌悪」を喚起させる描写が含まれている。この平民層の読者に対するシェパードのいわく言い難い距離感は、どう理解されるべきだろうか。

1641年の検閲制度の崩壊に伴い、大量の政治パンフレットや週刊新聞が印刷された結果、その読者対象は一般大衆にまで拡大した。17世紀イギリスの印刷文化が民衆の政治参加を促したわけだが、シェパードが「単純な人々」を読者対象に含めた理由も、この文脈で理解することができる。『妖精の水平派』の広告文が掲載された『メルクリウス・エレンクティクス』第35号で、シェパードは六つの会戦における議会派勝利の報を伝えているが、議会派の報じる王党派大敗の知らせは捏造であるから、彼等の作り話に騙されてはならない、と王党派の立場で読者に警鐘を鳴らしている。その一節に、議会派がこれまで「なんと冷淡に王国の大半を騙してきたことか、なんと国民感情に巧みに浸潤してきたことか (how strangely they had deluded a great part of the *Kingdome*, and how *closely* they had *woven* themselves into the *Affections* of the *people*)」と論ずる部分があるが<sup>36)</sup>、それはまさしく巨人の大言壮語に耳を傾けてしまった民衆の姿を想起させる。1648年春先に勃発した第二次内戦は、8月27日のコルチェスター陥落により王党派が大敗し、翌年1月30日の国王処刑へと至る。『メルクリウス・エレンクティクス』第35号は、1648年7月19日から26日までの、第二次内戦末期の出来事を報じており、王党派完敗まで残すところ一ヶ月という状況であった。つまり、第35号発行の時点で、王党派の敗退はほぼ決していたのである。このような状況下で、シェパードは、議会派が圧勝しているように見えるだろうが、議会派の報道は捏造であるから耳を傾けるなど訴えていたのである。シェパードは王党派勝利の希望的観測を見出していた訳ではなく、ほぼ敗北が決していると理解しつつ、それでも「騙されてはならない」と読者に呼びかけているのだ。シェパードは読者に対して、「私とその真実を突きとめるまで、諸君を報道で振り回したりしないようにしよう：信ずべき人々の報告では裏付けられない、どんな報道によっても読者を害することなど決してしまい (till I know the Truth thereof, I shall forbear to trouble you with Reports: being resolved never to injure the Reader with any thing I have not Assurance off by the

Testimony of such as I know how to believe.)」と語りかけてはいる<sup>37)</sup>。しかしながら、同時にこの表現は、読者が議会派の報道に既に「害され」た状態であることを、シェパードが暗に認めていることを示している。この議論の後に、『妖精の水平派』の宣伝文が掲載されているのだが、この文脈を考慮すると、「民衆嫌悪」を仄めかす本篇との共時性を見出すことができる。

## V.

サミュエル・シェパードの『妖精の水平派』は、エドモンド・スペンサー『妖精の女王』の翻案作品であり、特に表紙の不正確な誇張表現と、序文における登場人物の過度に単純化された寓意解釈は、王党派政治パンフレットとしての特徴を示している。そして、読者対象を下層階級の「単純な人々」にまで敷衍している点に、『妖精の水平派』最大の独自性を見出すことができる。序文において、シェパードは「単純な人々」が議会派の「体の良い見かけ倒しにあまりにも進んでそそのかされてしまう」ので、彼等が議会派の「過大評価や高言」に騙されないよう『妖精の水平派』を出版したと述べる。しかしながら、シェパードは「単純な人々」が従者タラスに打ち負かされる場面を含めて印刷しており、王党派擁護を呼びかけるためのプロパガンダとしては何とも後味が悪く、「単純な人々」への心的距離感を見出さざるを得ない。『妖精の水平派』が出版されたのは第二次内戦末期であり、王党派の敗北がほぼ決まっていた時期である。シェパードは『メルクリウス・エレンクティクス』第35号において、議会派の報道に騙されてはいけないと警鐘を鳴らしてはいるが、国民の大半が議会派に「害され」ていることを暗に認めており、実際の読者感化の可能性に対し懐疑的であったと思われる。シェパードは「単純な人々」である民衆を『妖精の水平派』の読者対象としながらも、「あまりにも進んでそそのかされてしまう」彼等に対し、スペンサーと似た「民衆嫌悪」を抱き、最終的に打ち負かされても仕方のない存在であると、民衆の「単純さ」を悲観していたに違いない。

## 引用文献・注

- 1) チャールズ一世が1646年5月5日にスコットランド軍へ投降後、6月24日に王党派軍がオックスフォードを議会派軍に明け渡したことで、第一次内戦が終結する(1642～1646年)。Knoppers, Laura Lunger, ed. *The Oxford Handbook of Literature and the English Revolution*. Oxford: Oxford University Press, 2012. Print. xx-xxi 頁参照。
- 2) King, John N. "The Faerie Leveller: A 1648 Royalist Reading of *The Faerie Queene*, V.ii. 29-54." *Huntington Literary Quarterly* 48 (1985): 297-308. Print. 302 頁参照。
- 3) 『妖精の王』は当時出版されず、手書き原稿をもとに1984年に初めて活字化された。Sheppard, Samuel. *The Faerie King* (c. 1650). Ed. P. J. Klemp. Salzburg: Institut für Anglistik und Amerikanistik, Universität Salzburg, 1984. Print.
- 4) King 前掲書2) 302 頁参照。
- 5) Marissa Nicosia は King の議論を踏まえた上で『妖精の水平派』をシェパードの作と断定し、「サミュエル・シェパードの『妖精の水平派』」と論題を付している。Nicosia, Marissa. "Reading Spenser in 1648: Prophecy and History in Samuel Sheppard's *Faerie Leveller*." *Modern Philology* 114 (2016): 286-309. Print. なお、『妖精の水平派』を主題として論じているのは King と Nicosia の論文のみであり、日本語による論文はこれまで出版されていない。
- 6) Sheppard, Samuel. *The Faerie Leveller: or, King Charles His Leveller Descried and Deciphered in Queene Elizabeths Days*. N.p., 1648. *Early English Books Online* にて2016年11月10日ウェブ閲覧。

- <[http://gateway.proquest.com/openurl?ctx\\_ver=Z39.882003&res\\_id=xri:eebo&rft\\_id=xri:eebo:citation:99872292](http://gateway.proquest.com/openurl?ctx_ver=Z39.882003&res_id=xri:eebo&rft_id=xri:eebo:citation:99872292)>
- 7) Richard Helgerson はイギリス・ルネサンス期の詩人を「アマチュア詩人 (the amateur)」、「職業詩人 (the professional)」、「桂冠詩人 (the laureate)」に大別している。スペンサーは自らが「アマチュア詩人」であると自覚しつつ、国民を詩で感化する「桂冠詩人」となる野心を持って自らの作品を出版した当代唯一の詩人である。Helgerson, Richard. *Self-Crowned Laureates: Spenser, Jonson, Milton, and the Literary System*. Berkeley: University of California Press, 1983. Print. 特に 55-82 頁参照。
  - 8) 『妖精の女王』執筆後、スペンサーは女王から年間 50 ポンドの年金を受給されるが、宮廷に召し抱えられることはなかった。Spenser, Edmund. *The Faerie Queene*. Ed. A. C. Hamilton. Text ed. Hiroshi Yamashita and Toshiyuki Suzuki. Rev. 2nd ed. Harlow: Longman-Pearson Education, 2007. Print. xvii 頁参照。
  - 9) Hadfield, Andrew. *Edmund Spenser: A Life*. Oxford: Oxford University Press, 2012. Print. 394 頁参照。
  - 10) Potter, Lois. *Secret Rites and Secret Writing: Royalist Literature 1641-1660*. Cambridge: Cambridge University Press, 1989. Print. 3-4 頁参照。
  - 11) Thomason, George. *Catalogue of the Pamphlets, Books, Newspapers, and Manuscripts Relating to the Civil War, the Commonwealth, and Restoration, Collected by George Thomason, 1640-1661*. Vol. 1. London: British Museum, 1908. Print. G. K. Fortescue による序文の xxi 頁参照。
  - 12) Potter 前掲書 10) 3 頁参照。
  - 13) Sheppard 前掲書 6) 1 頁参照。
  - 14) Sheppard 前掲書 6) 3 頁参照。
  - 15) Spenser, Edmund. 和田勇一・福田昇八 訳『妖精の女王 I』筑摩書房、2005 年。13 頁参照。
  - 16) Green, Roland, et al., eds. *The Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*. 4th ed. Princeton: Princeton UP, 2012. Print. 37 頁参照。Gordon Teskey 執筆の“allegory”の項目を参照。
  - 17) Spenser 前掲書 15) 14 頁参照。
  - 18) 主人公の騎士たちが体現する徳は第 1 巻から順に、「神聖 (Holiness)」、「節制 (Temperance)」、「貞節 (Chastity)」、「友情 (Friendship)」、「正義 (Justice)」、「礼節 (Courtesy)」である。
  - 19) Sheppard 前掲書 6) 3 頁参照。
  - 20) Sheppard 前掲書 6) 3 頁参照。
  - 21) Sheppard 前掲書 6) 3 頁参照。カッコ内は文意を補うために加筆した。
  - 22) Sheppard 前掲書 6) 4 頁参照。
  - 23) Sharp, Andrew, ed. *The English Levellers*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998. Print. vii-xix 頁参照。
  - 24) King 前掲書 2) 300 頁参照。
  - 25) Sheppard 前掲書 6) 4 頁参照。
  - 26) Spenser, Edmund. 和田勇一・福田昇八 訳『妖精の女王 V』筑摩書房、2005。362 頁参照。
  - 27) Sheppard 前掲書 6) 5 頁参照。
  - 28) Nicosia 前掲書 5) 304 頁参照。
  - 29) Spenser 前掲書 26) 363 頁参照。
  - 30) Sheppard 前掲書 6) 6 頁参照。
  - 31) 16 世紀イギリスでは、宮廷人としての規範を説いた、カスティリオーネ (Baldassare Castiglione, 1478-1529) の『宮廷人の書 (*The Book of the Courtier*)』(1528 年初版、英訳版は 1561 年) が大流行し、その影響下で執筆されたサー・トマス・エリオット (Sir Thomas Elyot, c. 1490-1546) の『為政者の書 (*The Boke Named the Governour*)』(1531) とともに、「高貴な」ジェントルマン像の形成に貢献した。Mason, Philip. *The English Gentleman: The Rise and Fall of an Ideal*. London: André Deutsch, 1982. Print. 50-52 頁参照。
  - 32) “Simple.” II.4.a. 参照。 *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1989. Print.
  - 33) Spenser 前掲書 8) 524 頁参照。

- 34) Spenser 前掲書 26) 373 頁参照。
- 35) Sheppard 前掲書 6) 11 頁参照。
- 36) Sheppard, Samuel, ed. *Mercurius Elencticus*. N.p., 1648. 272 頁参照。 *Early English Books Online* にて 2017 年 4 月 5 日ウェブ閲覧。  
〈[http://gateway.proquest.com/openurl?ctx\\_ver=Z39.882003&res\\_id=xri:eebo&rft\\_id=xri:eebo:citation:53403891](http://gateway.proquest.com/openurl?ctx_ver=Z39.882003&res_id=xri:eebo&rft_id=xri:eebo:citation:53403891)〉
- 37) Sheppard 前掲書 36) 276 頁参照。